

編集部 = 竹中光子、中務佐代子、上溝敏子、飯田憲三 knziid@gmail.com 090-6665-3750

トピックス 部会活動順次再開 14期生臨時講座・9/23に第1回開催

今号は4頁

○活動報告など詳細はホームページ（「OSNC」で検索）をご覧ください。

十人十色ひろば 今回は、15期生の廣中さんの登場です

15期生 廣中信一郎さん



私は愛知県豊橋市の出身で高校2年生の時に大阪に転校してきました。仕事では最初に入社した会社に定年まで勤めることができました。楽しみは夫婦で旅行に出かけるのが好きで、現役時代には国内・海外旅行に家族4人でよく出かけました。退職後は夫婦で年に1回のペースで海外旅行に出かけています。

健康のために**夫婦で山登りの会に参加し、日帰り山行や百名山などの宿泊山行**を楽しんでいます。

美味しい食べ物、飲み物のお店を巡るのが好きです。ステキなお店をご存じでしたら教えて頂ければ幸いです。皆さんとお会いするのが楽しみです。どうぞよろしくお願いします。

編集部

いつも柔和で優しい廣中さん、来春、講座でお会いできるのを楽しみにしております。

しぜん訪ねて 今回は12期生MMさんに「ヒマラヤトレッキングの楽しみ」を語って頂きます



ヒマラヤの峰々とトレッキングルート

今年は行けませんでした。ここ5年間ぐらいは毎年ネパールでの**ヒマラヤトレッキング**を楽しんでいます。

ヒマラヤトレッキングといってもエヴェレストなどの8,000m峰に登るわけではなく、せいぜい5,000mぐらいのところにあるベースキャンプまでの街道を往復2週間近くかけて、ゆっくり歩くだけです。一度行くと虜になり毎年行くようになってしまいました。魅力として、日本にはない**8,000m峰あるいは氷河などを間近に味わえる**ということがまずあげられます。次に世界中の**トレッカーとの出会い**。欧米、アジア、オセアニアなどの諸国からの大勢のトレッカーとのロッジでの片言の会話が楽しい。欧米からは若人、子連れも結構います。日本からはシニアが大半ですが...

「ナマステ!」、「ナマステ!」。インドやネパールでのあいさつの言葉で、日本の山で「こんにちは」、「お早うございます」とあいさつをするのと同じような感覚でヒマラヤトレッキングではトレッカー同士が声を掛け合います。



氷河



朝焼けのヒマラヤ

皆さん高山病のことを心配されますが、ゆっくり高度順応しながら高度を上げていくので殆どの人は大丈夫です。

また宿泊するロッジは日本の山小屋のような三密と違い、質素ですが基本的に2ベッドルームが確保できます。お勧めの時期は雨期を過ぎた10月末から11月末です。(MM)



秋は鳥の渡りのシーズンです。ワシ・タカの仲間にも夏鳥であるハチクマやサシバはこの時期に南へ一斉に渡ります。日本で記録されたワシ・タカの仲間は30種です。その中で大きな種をワシと呼ぶ傾向にありますが、ワシとタカに分類上の区別はありません。そしてこの仲間はタカ科23種（オオワシ、イヌワシ、オオタカ、ミサゴ等）とハヤブサ科7種（ハヤブサ、チョウゲンボウ等）の2科に分かれます。



タカの渡り

その違いとはタカ科は翼の先が指状に開き、ハヤブサ科は尖ること、ハヤブサ科は巣をつくらないことでしょうか。その中で春に渡ってきたタカ科のハチクマとサシバは、本州の中部から北部にて繁殖しますが、9月下旬から10月初旬にかけて今度は越冬地である東南アジアに向けて旅立ちます。そのハチクマとサシバの春秋の集団での移動行動を「タカの渡り」と言います。他にもノスリやオオタカ、ハイタカ、ツミなども春と秋（10月～11月）に、国内から遠くは中国や朝鮮半島までを集団で移動する「タカの渡り」のグループがあります。

特に秋の渡りは、南へ行く途中に待機しているタカが順次加わっていきその集団がどんどん大きくなります。

その渡りは壮観で、本当に感動ものですが・・・と同時に「これだけのタカ、どこにいたんやろ」「どうして旅立つ日が分かって集まって来るのか」と不思議でなりません。



サシバ



ハチクマ

9月も中旬になると秋の気配が強まります。里山の秋一番は栗でした。畑の一角に大きな栗の木があります。夏の終わりごろにはイガイガの殻が大きくなり、9月中旬、殻が弾け栗の実が落ちていました。殻の中に実が入ったまま落ちているのもありました。

これを拾ってビックリ！ほとんどの実は虫に食われていました。土の上に落ちたらすぐに虫が寄ってくるようです。それならと、木の下にブルーシートを敷き、毎朝、落ちている栗をすべて拾い集め、今にも落ちそうな実（殻）は枝ごと高所ハサミで切り取りました。

写真は一番たくさん取れた時の様子です。立派な大きな栗です。余談ですが、殻からポロッと出てくる栗が一番おいしいです。殻を破って取り出した栗はホクホク感が少ないようです。栗の農家さんの御苦労が分かるような気がしました。

畑、ミカン山では草との格闘が続いています。しかし、この季節になると、草が増える勢いより、草を刈る勢いの方が勝ってきます。見た目もきれいになります。



栗の収穫



きれいになった段々畑

10月に入りミカンが色付き始めました。

いよいよミカンの収穫時期です。

今年は花を付けなかった木が多く、収量は期待できませんが、酸っぱい甘いミカンが楽しみです。



ミカン色づく

そろそろかな?と思い、アサギマダラに会いに和泉葛城山に行ってきました。電波塔から鍋谷峠へ向かう道の両側にはアザミ、オトコエシ、ヒヨドリバナなど多くの花が咲いていて蝶の姿もあちこちで見られた。写真を撮れたものをご紹介します。最初に見つけた蝶はジャノメチョウでした。道端の草地をふわふわと飛んで草の葉に止まるが、近づくと直ぐに逃げてしまいなかなか写真を撮らせてくれない。追いかけて廻してやっと撮ったのが右上の写真。



ジャノメチョウ



アサギマダラ

左がアサギマダラ。旅する蝶として有名で、優雅に飛んでいる姿はひ弱に見えるが、数百キロも移動するというのは驚き。南西諸島では卵から成虫までのすべてのステージで越冬するらしい。

右のヒョウモンチョウの仲間は識別が難しい。たぶんメスグロヒョウモン♂のはず?



メスグロヒョウモン

下の写真、左端は私の靴の香りが甘いのか、なかなか離れない①イシガケチョウ。続いて②サカハチチョウ 白い斑紋が逆さの八の字に見える。春型と夏型では別の種のように。写真は夏型。③キンモンガ日中に活動するガの仲間。④ツマグロヒョウモン♀ 珍しくメスの方がカラフルな蝶食草はスマレ類。



①イシガケチョウ



②サカハチチョウ



③キンモンガ



④ツマグロヒョウモン

野の花このごろ 今回は ハギの花 について MKさんよりのレポート

この季節になりますとアキノノゲシやアキノキリンソウ等、秋（アキ）と名のつく草花が野山に色どりを添えます。なかでもアキノタムラソウやアキチョウジ、アキギリはシソ科で、淡紫から紅紫の色をした唇形の花を付けますが本当に皆よく似ていますね。シソ科は他にも茎が4角形（4稜）で、葉は十字対生し、雌蕊の子房が4裂し4種子の分果になるなど特徴が目につきやすい植物です。

シソ科でもホトケノザ、カキドオシ、タツナミソウ等は春に開花しますが、秋の今頃に開花する種も多く、南大阪ではヤマハッカ、ヒメジソ、イヌコウジュ、ナギナタコウジュ、メハジキは里山や低山に見られ、ジャコウソウ、マネキグサ、シモバシラ、イヌトウバナ、クルマバナ、ヤマジソ、ミカエリソウ（木本）は金剛山や岩湧山の麓で会うことができます。

我が家のチソも花は終わりごろで実の方が多くなっていますが、このチソは中国原産で奈良から平安時代に渡来したと言われ、古くから香味野菜として日本の食生活に入り込んできました。



アキノタムラソウ



アキチョウジ



ヤマハッカ

また、欧米でもバジル、ミント、ローズマリー、ラベンダー、セージ、マジョラム、オレガノ、タイム、レモンバームなどのハーブはシソ科です。シソ科の仲間の多くはこのように芳香成分をもっています。秋の野にチソ科の花を探して香りも楽しんでみては如何でしょう。



アキギリ

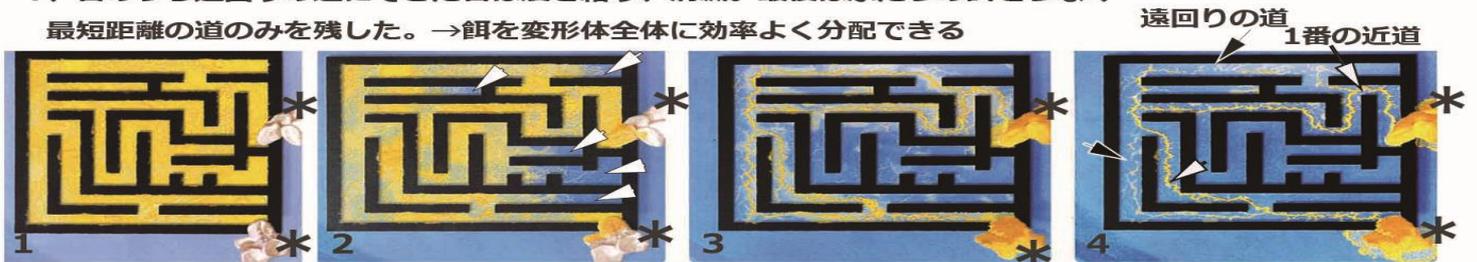
アメーバ動物・粘菌は優れた情報処理能力を持つ！！ A.F.
 生命の最小単位は細胞にある。人は約60兆個もの細胞でできている。一方1個の細胞のみからなる生物（単細胞生物）もある。物事を深く考えない単純思考の人のことを、“単細胞”と言うことがある。単細胞生物は賢くないのだろうか!? **粘菌の場合を見てみよう。** 右図は粘菌の生活環である。普段はアメーバ状(変形体)で、動き回って捕食。やがてキノコのような子実体となり、胞子を作る。胞子は粘菌アメーバーとなり、互いに接合して核分裂をを繰り返し、再び多核の変形体。この一生をぐるぐる繰り返してきた。粘菌変形体には、複雑な迷路を最短距離で通り抜け、効率よく細胞全体に栄養を行き渡らせる知恵がある。その様子を下図に示した。又、関東地方JR路線図の主要な町に餌を置いて粘菌を培養したところ、餌を求めて最短距離で結ぶネットワークを形成。この経路は都市をつなぐ複雑な鉄道網に非常に類似していたそうだ。



粘菌の行動は交通や上下水道などのインフラ整備に応用できるのではと、期待されているという。何と60兆個を超える細胞からなり、思考する脳や神経を持つ私より、はるかに賢いではないか!!

粘菌は複雑な迷路を解く：一緒に迷路を解いてみよう!!

- 1、迷路上に変形体をむらなく置き、変形体が互いにくっつき合って1細胞として迷路全体に広がってから(黄色が粘菌変形体)、迷路出入り口にそれぞれ一個ずつ餌(オートミール*印)を置く。粘菌はどうしただろう?
- 2、行き止まりの迷路に伸びていた変形体を引き上げる(矢印)。引き上げた変形体部分は餌の方に伸びていき、より多くの捕食が可能となる。餌が次第に変形体に覆われていくことに注目。
- 3、入り口と出口にある2つの餌をつなぐ路にそれぞれ太い管を形成。4つの経路が存在
- 4、管のうち遠回りの道にできた管は痩せ細り、消滅。最後はふたつの餌をつなぐ最短距離の道のみを残した。→餌を変形体全体に効率よく分配できる



中垣俊之、斉藤俊行著：かしこい単細胞 粘菌、福音館書店 を改変

コロナ済んだら行きたいな!

「けん」の旅日記

⑤ 10月 八幡平 もみじ

東北の「もみじ」はどこでも息を飲むほどの美しさですが、中でも八幡平はトレッキングに最適です。何せ八幡平山頂駐車場からは、頂上まで30分、山頂部にある巨大な火口湖「八幡沼」を周回しても2時間余りのなだらかな行程に過ぎません。この八幡平が秋には全山見渡す限りのもみじとなります。山頂付近は灌木が多様な彩りを見せ、麓にかけてはブナ林の黄葉が美しい。自分の体力や気分に合わせて、広大な山頂部の散策を自由に組み立てできるのが八幡平の良いところではないでしょうか。山頂エリアには、藤七(とうしち)、後生掛(ごしょがけ)、蒸ノ湯(ふけのゆ)などの野趣あふれる温泉が、傍に噴気をあげる源泉を誇示しながら点在しています。後生掛はかつての湯治宿の風情を色濃く残し、黄葉の時期には湯治部に多くの湯治客が逗留します。その難解な東北弁が「はるか遠方まで訪ねて来たなあ」との旅情を掻き立ててくれます。夜には湯治部からの笑い声も途絶え、ただひたすらの闇夜が一軒宿を包み込むのでした。

